

中小企業交流研究会 in 大阪開催趣旨

中小企業交流研究会実行委員：川口賢良、竹田雅信、黒澤兵夫

1、はじめに

中小企業をとりまく経営環境は、東日本大震災の影響に円高も加わり、年々厳しくなっており、取り組むべき課題は多岐に亘っている。

このような状況の中で、技術士の活動は、技術士会という閉鎖空間における交流がメインとなる傾向が強く、特に技術士のクライアントとして積極的にかかわりを持つべき対象であるにも関わらず、中小企業の方々とは、これまで十分な交流の機会がなかった。

今回の大阪大会では、中小企業側のニーズについて、技術士側が十分に把握できていない事に加え、技術士の持っている経験や能力を十分に提供できていないと言う反省から、中小企業の経営層の方々と技術士との積極的な交流を図る事を目的とし、中小企業を支援する公的機関、大学等の教育関係者とも連携を密にして、技術士という資格がビジネスとして発展するためのきっかけとしたい。さらに、本会では、参加者が一同に会し互いのニーズ・シーズを交換する交流会を開き、中小企業支援活動の契機としたいと考える。

2、テーマ設定の理由

みんなでチャレンジ・元気な企業
～中小企業と技術士の協働により近畿から新しい風を～

グローバル社会における近畿圏のこれからの役割は大変重要と判断する。近畿地区には創業以来すぐれた経営理念と哲学を持った企業が多くある。中小企業においてもユニークな製品と技術を持つアジア進出企業が多くみられる。

地理的にも東アジア圏の窓口たる位置を考えると、近畿から新しい風を起こしていきたいという思いと、そのために、中小企業を支援する公的機関、大学等の教育関係者、技術士が何をすべきかを考えるためこのテーマとした。

3、【中小企業交流研究会 in 大阪】プログラム

- 開会挨拶（9:30～9:35）
（公益社団法人）日本技術士会
近畿本部長 福岡 悟
- 基調講演（9:35～10:35）
大阪市立大学創造都市研究科 明石芳彦教授、（テーマ）「技術開発型中小企業の経営と課題・・・技術士の役割も考慮して」
 - ◆ 明石教授は、中小企業における技術マネジメントの研究や、アントレプレナーシップの研究における第一人者として活躍されている。今回の講演でも、中小企業の技術経営が如何にあるべきかという課題に、技術士がどういう役割を果たせるかという非常に興味深いテーマで話をしてくる。
- 事例講演（10:35～11:15）
技術士の中小企業支援例と中小企業から見た技術支援の在り方について
 - ◆ 技術士側からは、技術士という存在を知ってもらうために、技術士制度の仕組みや現状の説明と、中小企業の技術面や経営面に対して具体的に何を提供できるのかという事を、過去の事例を交えて話をしてもらう。
 - ◆ 中小企業の経営層からは実際には何に困っているのか、どんな形での援助を期待しているのかという事を話してもらう。
- パネルディスカッション（11:20～12:30）
「技術士の提供できる技術支援と中小企業のニーズのギャップ」
事例講演のスピーカーと、基調講演の明石教授をパネラーとして、中小企業の経営層が技術面で本当に困っている事の本質を探り、それに対してこれまで、技術士がなぜ

中小企業に深く入り込めなかったのかを議論する。

➤ 交流会（12：45～14：30）

講演とパネルディスカッションは、大学と技術士と企業経営者の接点を求める企画である。

交流会は、行政機関、中小企業経営者と技術者の交流で技術士の企業・社会貢献とビジネスへの発展を期待する企画と位置付ける。

講演会で盛り上がった議論を継続するため、昼食時間を別に取り議論を中断する事無く、あえてパワーランチとして、講演会、パネルディスカッションの話題を交流会の中でも継続して議論する事で、忌憚のない意見交換の場となることを期待する。

4、特徴

4.1 ～ゼロからのスタート～

地域本部にはその委員会組織はなく、統括本部からの支援にも限界がある状況から始まった。

担当の竹田氏にお願いし近畿本部実行委員会を組織し、統括本部との協働プロジェクトチームを編成した。結果は、その準備と運営のすべてを近畿本部の皆様をお願いする状況に至り、近畿本部の協力を深く感謝する。

4.2 組織：～協働プロジェクトの成功～

協働プロジェクトの構成を表に示す。

(統括リーダー) 川口賢良

中小交流実効委員会チーム	近畿実行委員チーム
(リーダー) 黒澤兵夫	(リーダー) 竹田雅信
中澤喜久雄、三好勉、	杉本哲雄、佐野義幸
河原弘明、池田大亮	佐原良夫、深田晃二
事務局：三上彰久	森末清成
	河内近畿経営工学部会長

私たちは、活動を通称「大阪プロ」と呼ぶことにし、休日にもかかわらずWeb会議を開き大阪と東京にそれぞれのメンバーが集い意思決定を行ってきた。予算ゼロという大変厳しい統括本部判断に不満を出すこともなく全員が団結できていることは、中小企業交流への関心の大きさを証しである。

4.3 内容：～ビジネスにつなげる～

当初、企画案は、技術士のみを対象としていたが、関東と違い、形式主義から脱し実効主義で、大学、行政機関、中小企業経営者と技術士の求めるものを追究しビジネスチャンス拡大につなげる企画とした。

5、意義：～閉鎖空間からの脱皮～

5.1 閉鎖空間からの脱皮

企業の99.7%を占めるといわれる中小企業は大きな支援対象である。

個々の技術士は、これまで、なにがしか中小企業と関わりを持ってきた。しかし、これからは、閉鎖空間から脱皮しオープン化し組織的取組にし、より活発にする必要がある。

技術士会で、外に開いた数少ない活動の一つが中小企業交流活動であり、【中小企業交流研究会 in 大阪】もこの意味で大変重要な位置づけと考える。

5.2 地域展開

関東では、「中小企業活性化研究会」を文部科学省、経済産業省、開催県とその関連機関の後援を得て開催してきた。見直す点も多いが、これを地域に展開することは、国や関係省庁、地方行政機関の技術士に対する認識を高めるという点で意義は大きい。重要なことは地域の特色と事情に合わせ、それぞれのニーズに合った規模と企画で実行することである。

【中小企業交流研究会 in 大阪】の中でも近畿地域ニーズに沿った内容が多くみられる。

形式から実効・ビジネスチャンス追究へ
コストをかけない投資効果の重視
身近なテーマで企業経営者と接点を求める

6、終わりに

以上、初めての地域展開で、至らない点も多いが【中小企業交流研究会 in 大阪】は、大きな意義が期待できる会と信じる。

終わりに、この会が、中小企業経営者、中小企業を支援する公的機関、大学等の教育関係者が互いに交流を深め、技術士が果たす役割を確認しそれが近畿地域のさらなる発展につながることを期待する。